知・体」を鍛える「ゴールデン三角」を教育理念に掲げ、挨拶や礼儀、清掃活動など日本の教育文化を取り入れています。小 4 から英語・日本語教育を実施し、倍率 5〜17 倍の難関校でありながら、学費は一般サラリーマンの給与 3 ヶ月分程度に抑えられています。

日馬富士理事長との対話の中で注目されたのが、同校が中学 1〜4 年生を対象に実施している「労働キャンプ」です。電気のない自然環境下で薪を拾い、火を起こし、ゲルを組み立てて生活するプログラムです。日馬富士理事長から、「物やインフラに恵まれた日本の若者にとっても、この不便な環境での労働キャンプは『あることへの感謝』と成長の糧になるはず。日本の高校生との合同サマーキャンプを実現させたい」との情熱的な提案がありました。また、「子どもたちに新鮮な無添加ミルクを飲ませたい」という想いから「日馬富士MILK FARM」を立ち上げ、学校給食でのミルク提供を実現させたという話もありました。この取り組みは現在、国家事業として全国展開が進められています。



中央：新モンゴル日馬富士学園理事長・日馬富士公平氏

今回の 6 日間の視察を通じ、モンゴルの都市課題の現実を知ると同時に、それを克服しようとする国家の力強い息吹と、次世代育成に情熱を傾けるリーダーたちの姿に直接触れることができました。日本の平均年齢 49 歳に対しモンゴルは 27 歳。モンゴルはとても若者人口が多い国です。単に年齢の違いだけではないようにも思いますが、知り合った多くの人からこの国を変えていこうというエネルギーを感じました。

討議し提案された内容は、私たちだけで対応するには過分なものもありますが、かつて上田会長が繋いだモンゴルの人たちとの交流と協力の輪を一歩でも前に進めるためのアクションを続けていければと思います。

最後に本視察を支えてくださった関係者の皆様、そして現地で温かく対応してくださったモンゴルの皆様に心より感謝申し上げます。



スモールヌイ（市政府庁舎）の前で、五十嵐理事長とともに

大阪日ロ協会が視察団 9月 ペテルブルクを訪問

大阪日ロ協会は、9 月 9 日〜14 日、サンクトペテルブルクへの視察訪問を行いました。これは 9 年ぶりのロシア訪問団です。ウクライナ戦争の開始以後、外務省の海外安全情報でロシアはレベル 3（渡航中止勧告）となっており、日ロの人的交流（とくにロシア訪問旅行）はこの 5 年間ほとんどストップしています。そんな中でもロシアの市民生活の実情を視察し、将来の関係改善と対話の糸口を探ろうと、ちょうど 9 月 11 日に『第 3 回日露学術交流シンポジウム』がペテルブルク国立経済大学で開催される日程に合わせて、視察訪問団を企画しました。

視察団には、紀田馨・事務局長（大阪府議会議員）、三浦寿子・副理事長（元大阪府議会議員）、高木浩司・あいちロシア協会常務理事（愛知県議会議員）ら 9 名が参加しましたが、現地では学術交流シンポに参加する五十嵐徳子・理事長（京都外国語大学教授）ら 4 名の研究者も一部日程に合流するなど、総勢 13 名の訪問となりました。

一行は、学術交流シンポの開会冒頭を見学したほか、サンクトペテルブルク市政府対外関係委員会の表敬訪問、露日友好協会ペテルブルグ支部での交流会・日本語教室見学、松尾浩樹・在サンクトペテルブルク日本総領事との懇談、今年 2 月に開設された日本ビザセンターの見学など、充実した視察日程をこなし、同時にペテルブルク観光を楽しみました。

第 3 回日露学術交流シンポジウム（9 月 11 日）

「日本とロシア、持続可能な発展への道」と題した日露学



術交流シンポジウムには、日ロ双方の研究者、露日協会の関係者、そして訪ロ視察団など、合わせて 50 名が参加。ワシレンコ・国立経済大学副学長、ムドラク国際協力協会会長などの開会挨拶に続いて、日ロの研究者 20 名がそれぞれの研究成果を発表しました。

この学術交流シンポは、故藤本和貴夫理事長（大阪大学名誉教授）が、新型コロナとウクライナ戦争で中断していた「日ロ極東学術交流」（1984 年より開始）を再開するため 2024 年 4 月にウラジオストクとハバロフスクを訪問して協議した際に、ロシア側から「ペテルブルクでも学術交流をやろう」という呼びかけがあり、24 年秋から開始されました。昨年 4 月に藤本先生が逝去された後は、五十嵐徳子・理事長らによって引き継がれ、今回で 3 回目の開催となります。日ロ関係は厳しい状態にありますが、このような学術交流・人的交流を継続することが、将来、関係を再構築する際の大きな手がかりになると思います。

ペテルブルク市政府対外関係委員会を表敬訪問（9 月 11 日）

9 月 11 日の午後、視察団はスモールヌイのペテルブルク市政府を表敬訪問し、カルガノフ対外関係委員会副議長と会見しました（五十嵐理事長も学術交流会から合流）。

同副議長は、「複雑な情勢下にもかかわらず、大阪から大勢来てくれて大変嬉しい。今すぐに何かできるわけではないが、接触を続けることで将来一緒に協力できる課題を探したい」と挨拶し、「今後は、オンラインで定期的にミーティングをやろう」と、いくつかの提案をしました。これに対して、紀田事務局長が、大阪市長でもある横山英幸氏が日ロ関係に思いを寄せる一人の政治家としてしたためた親書を手渡し、「大阪日ロ協会としても、今後ペテルブルク市と協力できる課題を検討したい」と応じました。**（写真はカルガノフ副議長に横山市長の親書を手渡す紀田事務局長）**



露日友好協会ペテルブルク支部を訪問、日本語教室を見学

9 月 12 日の午後、視察団はペテルブルク国際協力協会と露日友好協会などが入る「友好の家」を訪問し、そこで開講されている日本語教室を見学しました。この訪問には五十嵐理事長ほか学術交流に参加した 4 名の研究者も合流し、一緒に交流会を行いました。

ツベトコワ・露日友好協会事務局長が、「これまで、『日本の春』『日本の秋』という日本文化フェスティバルが毎年行われてきたが、最近は行われていない。2004 年に大阪ペテルブルク姉妹都市 25 周年記念代表団が大阪を訪問し、子ども絵画を開催したことを懐かしく思い出す。国同士の関係は悪くても、破損した陶磁器を漆で繋いで直す『金継ぎ』のように、壊れた部分を修復しさらに価値の高い新しい関係を作っていきたいと思う」と話したのが印象的でした。



露日友好協会の日本語教室を見学

日本語教室の責任者・ダーンシナさんは、「日本語講座を始めて 18 年になる。多くの市民や子供たちが日本語を学んでいる。日本語は難しい言語なので、興味を持たせて学習が進むように、お茶、琴、着物などの文化教室も行っている」と、着物姿で楽しそうに話してくれました。露日友好協会が日本文化に親しむ多様な活動を日常的に行っているのを見て、「大阪日ロ協会も見習わなくては」という思いを強くしました。

日本ビザセンターを視察（9 月 10 日）

現在、ロシアを訪問する日本人は非常に少ない状態ですが、逆に日本を訪問するロシア人は大幅に増えています。昨年、訪日ロシア人の数は、コロナ前（2019 年）の 2 倍近い 19 万人を記録しました。その大半が観光目的です。ビザ申請者の急増に対応して、日本大使館・総領事館の事務負担を軽減するため、モスクワとペテルブルグに「日本ビザセンター」が今年 2 月に設置されたことが日本でもニュースになりました。

日本ビザセンターは、VF Services LLC という会社が運営しており、オーストリア、フランス、スイス、マルタなど 30 カ国以上のビザ申請を取り扱うビザセンターの中にありました。担当者によると、人気トップ 3 は日本、フランス、イギ

リスで、季節によって波はあるが、1 日 250 人以上が日本ビザの申請に来るそうです（モスクワのビザセンターは 1 日 1000 人以上！）。利用者にとっては顔写真の撮影、書類の書き方支援、遠隔地居住者への書類送付などの追加サービスがあり、各国領事館にとっては煩雑な受付業務が無くなり書類審査と交付手続きに専念できる事務軽減メリットがあるので、双方に喜ばれているとのことでした。

在ペテルブルク日本総領事館・松尾浩樹総領事と面談



ペテルブルク到着の翌日（9 月 10 日）、まずはロシアの現在の状況を教えてもらおうと、日本総領事館を訪れ、松尾浩樹総領事と面談し、以下のようなお話を伺いました。

＜松尾総領事の話＞

日本の新聞ではウクライナのドローンによる市郊外の石油基地や物流倉庫への攻撃でペテルブルグやモスクワが日々攻撃されているように報道されているが、実際には市内中心部への攻撃はほとんどなく、市民生活に直結するような被害は出ていない。市内の店やスーパーなどは通常通りに動いている。

ただし、戦争の影は、市民の自由な言論空間の制限（＝戦争批判はできない）となって現れており、非友好国の外交官としては、ロシアの官公庁との接触がしにくいなど、いろいろと難しい事態が生じている。

もちろん日本政府は、ロシアのウクライナ侵攻は、国際法違反で平和を脅かす行動であり、容認できないという立場から、欧米とともに対ロ制裁に加わっている。しかし、それでも文化交流や人的交流は、将来の関係改善のために、維持し続けるべきだというのが私たちの考えだ。今年 8 月には 6 年ぶりに日露青年交流事業で、学生の短期ロシア語研修を再開し、ペテルブルグの大学で 2 週間の研修を行った。レベル 3（渡航中止勧告）が出たままだが、但し書きで「(留学、ビジネス等）やむを得ない場合は、渡航を妨げない」ということにしており、その実践例として短期ロシア語研修を再開した。

大規模なものではないが、在ロシアの日本大使館・総領事館は、生け花や日本舞踊など日本文化を市民に紹介するイベントを適宜行っている。日本側からロシアと交流したい希望があれば総領事館として応援するし、ロシア側から交流の要望があれば、日本のパートナー探しなどの支援も行うつもりである。

ネフスキー大通り十字架行進（9 月 12 日）

「明日、ネフスキー大通り十字架行進という大規模なイベントがあるので、一緒に参加しないか」という提案を市政府対外関係委員会のカルガノフ副議長から突然受けました。訪問団は、12 日はピョートル大帝夏の宮殿（ペテルゴフ）を観光する予定だったのですが、「これもいい体験」と急遽 3 名がカルガノフ副議長とともに十字架行進に参加することになりました。ネフスキー大通りは、サンクトペテルブルク市の中心部を走るメインストリートです。カザン寺院の前を 11 時にスタートして、アレクサンドル・ネフスキー広場まで約 4 キロの道のりを、ロシア正教の修道僧を先頭に、イコン（宗教画）や旗や飾り台を持った人々が、沿道で大勢の人が見守る中を次々と行進しました。バス停など市内のあちこちに十字架行進の大きなポスターが飾られており、ペテルブルクの大規模な宗教的行事として定着している様子でした。



ネフスキー大通りを歩く十字架行進

サンクトペテルブルクの観光も楽しむ

訪問団は、公式行事の合間に、サンクトペテルブルクの観光も大いに楽しみました。イサク寺院、青の騎士像、血の上の教会、アレクサンドル・ネフスキー修道院、ピョートル大帝夏の宮殿、マリインスキー劇場でのバレエ鑑賞、エルミタージュ美術館などなど、ペテルブルクの主な観光地を一通り見学しました。市政府を表敬訪問した際には、歴史的建造物であるスモーリヌイの内部も見学し、1917 年のロシア革命でレーニンが革命政権の樹立を宣言した大広間や、ソ連時代から 1990 年代末まで実際に使われていた地下防空壕（核シェルター）を保存する博物館などを特別に見せてもらいました。「次回は、モスクワも見たいね」「せめて半日か 1 日、自由に街歩きできる時間が欲しかった」というのが多くの参加者の皆さんの感想でした。

今回の訪問では、ペテルブルク在住 20 年以上で、露日友好協会の事務局員であり日本語教師でもある田中美穂子さんに、現地ホテルやバス、通訳ガイドの手配をはじめ公式訪問日程のアレンジ、関係方面との連絡などで大変お世話になりました。記してお礼を申し上げます。

（大阪日ロ協会会報 NO.27 より転載。一部の写真は割愛しました）